

居場所づくり交流会Ⅲ 講演要旨

- ◇ 今日の4つの事例は、つながることで楽しくなり、楽しいからやる気が出てくるという話だったが、地域から孤立すると「やる気が起こらない」「負担感、やらされ感」が出てきてしまう。
- ◇ 「楽しさ」は駆動力・持続力を生み出す。「楽しさ」を生み出す社会の仕組みが必要である。ところが、今の社会は人々が孤立する社会であり、社会の分散と解体が起きている。
- ◇ 今、超高齢社会である。しかし、高齢社会は高齢者だけで構成されているのではなく、6割は高齢者ではない人々によって構成されている。高齢社会の問題の解決には、高齢者以外の世代に対する政策も必要である。
- ◇ 2007年生まれの子どもの平均寿命は107歳。22世紀まで生きる人が多い。今の福祉制度は、人口が増加する社会を前提に作られてきた。今後は、「人生100年時代」を前提に制度を再設計しなければならない。今後は、高齢者への対応から子どもたちを主役に持続可能な社会をつくることが重要である。
- ◇ しかし、時代の価値観は、工業社会のままであり、人を道具・手段とする社会のままである。工業社会の学力は、ふるさとを捨てる学力であり、人を入れ替え可能にする社会である。脱工業社会には、人を手段ではなく目的としてみることも重要である。
- ◇ 人の欲望は、存在欲求によって満たされる。最近の学生に聞くと、所有欲が低下し、物はシェアすればよいという発想に変わってきている。物よりも、人と相互承認される関係性を大切するようになってきている。島根県海士町の隠岐島前高校の卒業生の中には、慶応義塾大学等の首都圏の大学に進学した後に、地元に戻る生徒が少なくない。理由を尋ねると、「先輩たちは仕事がないと言って島を出て行ったが、自分たちは地元に戻って仕事をつくる」と答えたそうだ。
- ◇ 2030年には、今ある仕事の47パーセントは消失しているという。これから大人になる子どもたちは、自ら仕事をつくりだすような力が必要だと言われている。こうした学力を21世紀型スキルという。
- ◇ 最近の若者は、「個性化」を強要される一方で、実際には、周りよりも一歩抜きんでることを怖がる傾向がある。また、「やりたいことをやりなさい」と言われても、それが見つからず、自分はダメな人間だと思い、自己肯定感が低下してしまっている。こうした中で、学校は「教育機関」から「福祉機関」へと変わってしまっている。
- ◇ 先ほどの事例発表の中に、子ども食堂の話があった。日本では、子どもの貧困が進んでいる。年収120万円以下の家庭を貧困家庭というが、今、子どもの6人に一人が貧困になっている。母子家庭になると、その割合が5割になる。問題は、貧困が世代を超えて連鎖していくことだ。
- ◇ 子どもたちは、自己肯定感が低いことがわかっている。埼玉県が実施した学力調査によれば、子どもの非認知能力（がんばろうとする気持ち、やり直そうとする気持ちなど）が高まると、認知能力（学力）が伸びることがわかったという。

- ◇ これから大事なものは、好奇心と無形資産の価値（人間関係）である。社会を生き抜いていく力をつけるには、困ったことがあっても社会が助けしてくれると思える「社会に対する信頼」が大切である。
- ◇ しかし、人々はこうしたことに気づいていても、なかなか行動に結びつかない。では、どうしたらいいか。今日の事例発表にあったような「小さなコミュニティ」を地域に沢山つくるのが重要ではないか。コミュニティの作り方は、一つとは限らない。色々なやり方があっていい。
- ◇ 町内会レベルで、もっと小さなレベルで、人々が集まり、つながる場を沢山つくっていく。こうした実践を積み重ねていくことが大切なのではないか。